

「食べられていきますか？」から始まる口腔ケア
 —早めの歯科との関わりが、人生の選択肢を守る—

在 宅介護において、訪問歯科に依頼するのはどのようなタイミングが多いだろうか。「生活」をみる歯科医師、齋藤貴之氏は、もっと早めの歯科との関わりをと唱える。長年、訪問診療に携わるなかでケアマネジャーの勉強をする必要性を感じ、さらに、居宅介護支援事業所を運営していたこともある齋藤氏からのケアマネジャーへのメッセージをお届けする。

「口の中」ではなく
 「生活」をみる歯科へ

「口の中だけでなく、その人の生活を見る」

私は現在、歯科医院での外来診療に加えて、通院が難しくなった方のご自宅や施設に伺い、口腔ケアや嚥下（えんげ）の支援を行っています。

もともとは大学病院の補綴（ほてつ）科に所属し、高齢者の入れ歯治療を中心に診療していました。当時はインプラントや審美補綴にも興味があり、「どうすればより良い入れ歯を作れるか」を考える日々でした。

転機となったのは、実際に在宅診療に伺ったことです。ご自宅で患者さんと接してみると、診療室では見えなかったことがたくさん見えてきました。

「調子がいいですよ」とおっしゃっている患者さんでも、実際にコタツの上にあるお煎餅を食べてもらうと、うまく食べられないことがありました。逆に、こちらが想像していなかったような食べ物を好んで食べていることもありました。

それまで私は「どういう入れ歯を作るか」という視点で診療していました。しかし在宅の現場を見て、「この入れ歯は生活の中で本当に機能しているのだろうか」と考えるようになりました。

現在の診療の原点は、この時の体験にあると思っています。

訪問診療を始めると、診療室とはまったく違う世界が広がっていました。

ケアマネジャーの皆さまにとっては当たり前のことかもしれませんが、実際にご自宅に伺うと、その人の暮らし方、家族関係、食事の環境、生活のリズムなどは一人ひとりまったく異なります。

診療室では「この症例にはこの治療」といったある程度の型がありますが、在宅ではそのような画一的な対応ではうまくいかないことも多くありました。

その中で私は、「食べること」がどれほど生活に深く関わっているかを実感するようになりました。

例えば、歯が痛くて食べられない、入れ歯が合わない、むせてしまう、口の中が汚れている。こうした問題があると、食事がだんだん億劫になっていきます。

食べる量が減ると栄養状態が悪くなり、体力も落ちていきます。そうすると外出の機会も減り、人との交流も少なくなり、生活全体が小さくなってしまいます。

こうした現場を何度も経験する中で、「歯科がもっと早く関わることができ



執筆 ▶
 齋藤貴之（さいとう・たかゆき）

歯学博士（老年歯科補綴学）
 日本老年歯科医学会認定医・専門医・指導医・摂食嚥下機能療法専門歯科医師
 日本摂食嚥下リハビリテーション学会認定士、歯科臨床研修医指導医
 東京歯科大学 非常勤講師（摂食嚥下リハビリテーション）
 暮らしの保健室かなで 理事、介護支援専門員

2003年、東京歯科大学歯学部卒業。
 2007年、同大学院修了（現 老年歯科補綴学）
 2008年 東京都江戸川区こばやし歯科クリニック
 副院長（その後、訪問歯科診療部を統括）
 2020年 ごはんがたべたい。歯科クリニック 院長
 2025年 たのしみ歯科 開設 院長就任